

【IYEO会員個人の活動】 元 内閣官房副長官、総務副大臣

安倍・福田内閣で内閣官房副長官、総務副大臣を務められ、現在は、狭山市名誉市民、西武文理大学特命教授であられる大野松茂先生は、1962年、26歳の時に当時の総理府（現在の内閣府）が主催する第4回日本青年海外派遣事業（東南アジア第2班）に参加されました。

特に印象的だった出来事を教えてください。

派遣前の研修で「この財政厳しい折に皆さんを海外に派遣するのですから、決して、無駄に物事を見ないように。」と指導されたことを覚えています。そのため、派遣先では、視察などのプログラムはもちろん、移動中のバスに乗っている時も必死になって外の景色を見ながら、現地の生活様式などを観察し、見たもの全てを吸収しようと一生懸命になっておりました。そうやって集中して観察していると、民家の軒先に干してある洗濯物が目につきます。干してあるものは非常に質素で暮らしの貧しさを感じさせるもので、これまで当たり前だと思っていた日本の生活が実は恵まれていたのだということに気づかされました。決して、無駄に物事を見ないように意識すると、確かに目に入る一つ一つが自分にとって学びになります。そのため、当時の名残で、60年たった今でもいまだに乗り物に乗っている時に居眠りなんかできませんよ。



狭山市名誉市民、西武文理大学特命教授

大野松茂さん

第4回日本青年海外派遣事業 東南アジア第2班（1962年）

日本を代表するという体験

戦後の東南アジアを訪問するわけですから、もしかすると日本人だということで石を投げつけられるのではないかと覚悟すらしていたんです。ところが、私たち派遣団は行く先々で大歓迎を受け、あちこちで感謝の言葉をいただきました。カンボジアでは「日本のおかげで教育の機会を与えていただいた。」「日本の方々は、数を数えるとか、文字の大切さを教えてくださいました。」とお礼を言われることさえあったんです。こうした経験を通じて、実は、日本という国は世界で高く評価されていたんだということを初めて知り、これまでの歴史認識が一変しました。加えて、自分が日本を代表する青年として外国の方とやりとりする中で、日本人としての誇りや意識が芽生えたような気がします。

どの訪問国にもそれぞれ思い出がありますが、カンボジアは熱心な小乗仏教の国で、貧しい中でも明るく、建国の意欲がみなぎっている印象的な国でした。農業関連の視察の際に、日本で使っている農業について話したところ、虫を殺すことにも抵抗を感じるようでした。そんな心優しいカンボジア人の国でポル・ポト派によって大虐殺が行われ、国の信頼を失ってしまったのは本当に残念なことでした。政治が安定していなければ、国の発展がないということを感じ、政治の道を志そうと思った出来事でした。

今は、お金さえあれば、世界中どこにでも行けるという時代です。そのような中で、国が実施する国際交流事業に参加する意義は何かというと、それは日本を代表するという経験です。国が送り出してくれるのです。単なる旅行ではあり得ないような経験ができるからこそ、事業に参加する皆さんには、その重みを改めて自覚し、多くを学んでほしいと思います。

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授 公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長の池上清子さん
は、1974年、大学生の時に第1回「東南アジア青年の船」事業に参加
されました。船での体験はその後のキャリアに影響を与え、一貫して、
開発途上国の女性の健康推進、自立支援に携わってこられました。

人とどのように関わるべきかを学ぶ

若いころの経験は、その後の人生を大きく左右します。私にとって、
二つのイベントは、70歳になる今でも、その影響を感じることがあり
ます。一つ目は高校生の時にAFSを通してアメリカに留学したこと、二
つ目は大学生の時に第1回「東南アジア青年の船」事業に参加したこ
とです。

「東南アジア青年の船」事業では、船という逃げ場がない環境下で、
どのように人と関わるべきかを学んだと思います。船内では、あの人
と話したくないとか、この人とは会いたくないからといってずっと部屋
に籠もっているわけにはいきません。相手を変えることはできません
から、自分の考え方や行動を変えていくしかありません。どうしたら
一緒にやっていけるのか、どうやって折り合いをつけていくのかを、参
加青年一人一人が学びました。逃げ場がないというのはネガティブな
意味ではなく、今の現実の社会の中でもどのような人間関係を構築で
きるかということと共通していると感じています。

誰一人取り残されない社会を作る

タイのバンコクに参集したとき、当時のバンコクで一番良いホテルに泊まりました。首都の立派な通りにあるホテルなのに、
ホテルの前に水たまりがたくさんできていて、路上生活者の子供たちが水遊びをしていました。この光景を見て、日本はこうい
う段階をもう脱したのだなと思いました。同時に、これから日本がするべきことは、このような路上生活をせざるを得ないよう
な家族、つまり社会から取り残されやすい人に対して何が出来るかをタイの人と一緒に考えることではないかと気づいたのです。
私がやるべきことは、今のSDGsでも言われているように、誰一人取り残されない社会を作っていくことなのだなと思ったのを覚
えています。

発展途上の国は、これからこういう国にしよう、上を目指そうというエネルギーに満ちています。一方で、ある程度発展した国
は、上を見るといよりは後ろに取り残されている人がいないかどうか、みんなと一緒に歩んでいけるかどうかを見なければい
けないのではないのでしょうか。前を見るだけが大切なのではなく、時には後ろも振り返って、自分たちよりも遅れている人がい
れば、なぜ遅れているのか、その人たちのために何が出来るのか、一緒に何をすればよいのかを考える必要があります。

今でも私の心の中に残っているのは、この船の事業に参加して、海外の青年と共に暮らし、意見交換などを通して、普段はあ
まり考えもしないこと、つまり、自分って何?とか、日本という国は海外からどのように見られているのだろうかといった点を深く
考えさせられたことです。

この思いは、大学院を卒業して就職する時の進路決定に大きく作用しました。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) に職を
得たのも、世界から貧困をなくし、格差是正に寄与するような仕事に就きたいと考えたからです。私はこれまで、日本のNGOや
国際NGOでも仕事をしてきましたが、国際協力を通じて、女性の人権を守ったり、欲しい時に子どもを出産したりできるように
情報とサービスを提供してきました。特に、国連人口基金 (UNFPA) では、小さいながらも、東京事務所のトップとして、責任が
重い仕事を任されました。その後、母の介護のため国連を早期退職して、現在は大学で教えています。



長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長

池上清子さん

第1回「東南アジア青年の船」事業(1974年)

【IYEO会員個人の活動】 【祝】令和2年春及び令和3年秋の叙勲

令和2年春の外国人叙勲において第2回「東南アジア青年の船」事業のタイ既参加青年であるウスイット・デッカムトーン氏 (Mr. Visit Dejkumtorn) が、そして、令和3年秋の外国人叙勲において、第10回「東南アジア青年の船」事業のインドネシア既参加青年であるリノ・ウィチャクソノ氏 (Dr. Rino Wicaksono) が、日本とタイ・インドネシアを始めとするASEAN各国との間の青年交流及び友好親善に寄与した功労を讃えられ、旭日双光章を受章されました。

「東南アジア青年の船」事業外国人参加者の旭日双光章受章は、マレーシアのトゥアン・ハジ・モハメド・アウズィ・ビン・ダウド氏 (Tuan Haji Mohamed Auzi Bin Daud) (平成19年春の外国人叙勲) に続いて、合計3名となりました。

ウスイット・デッカムトーン氏は、1975年に第2回「東南アジア青年の船」事業タイ参加青年として参加した後、1988～1992年に「東南アジア青年の船」事業のタイにおける事後活動組織 ASSEAY Thailand会長を務めました。現在は、ASSEAY Thailand顧問を務めています。

1991年には、自身のネットワークを活かして非営利団体ファンド・フォー・フレンズ (Fund for Friends: FFF) を設立し、「希望あふれる子供たちのためのプロジェクト (For Hopeful Children Project: FHCP)」を立ち上げました。このプロジェクトでは、孤児や難民、山岳少数民族、障害を持っている子供たちなど、社会的困難を抱える子供たちを「希望あふれる子供たち (Hopeful Children)」と呼び、タイ全国各地の「希望あふれる子供たち」を招いて、海水浴などの活動を含む宿泊型キャンプを行います。プロジェクトの立ち上げ以来、現在まで30年にわたり毎年実施され、現在では、タイだけでなく、日本や東南アジア各国からも多くの子供たちやボランティアが集まり、参加者総勢1,000名を超える一大プロジェクトとなっています。日本からは、2008年から毎年、(一財) 青少年国際交流推進センターが実施するタイ王国・スタディツアーの参加者 (大学生及び社会人) が、FHCPのボランティア・スタッフとして現地の実行委員と協働しながら、日本とタイの友好関係や連携強化に加わっています。



ウスイット・
デッカムトーンさん

第2回「東南アジア青年の船」事業
(1975年)



「希望あふれる子供たちのためのプロジェクト (FHCP)」
のポスター

ウスイット・デッカムトーン氏は、長年にわたる日本・タイ間及び世界各国との青年交流の促進に寄与した実績が認められ、2004年にはSSEAYP国際賞 (SSEAYP International Award)、2013年にはタイ政府社会開発・人間安全保障省による社会的弱者の子供たちの活動への表彰制度プラチャーボーディ賞 (Prachabordi Award) を受賞されています。



リノ・
ウィチャクソノさん

第10回「東南アジア青年の船」事業
(1983年)

リノ・ウィチャクソノ氏は、1983年に第10回「東南アジア青年の船」事業インドネシア参加青年として参加した後、「東南アジア青年の船」事業のインドネシアにおける事後活動組織 (現在のSSEAYP国際賞・インドネシア) の立ち上げに尽力し、1987～2013年にSSEAYP国際賞・インドネシア会長を務めました。現在は、SSEAYP国際賞・インドネシア評議員会会長を務めています。

2007～2012年には、日本に関する情報を東南アジアへ伝え、日本とASEAN各国との交流を促進することを目的として、インドネシア・ジャカルタでの「JASEAN (日・ASEAN) フェスティバル」の開催や、雑誌『JASEANマガジン』の発刊に取り組みました。フェスティバルや雑誌を通じて、多くの子供もたちが日本文化 (漫画やアニメ、キャラクター、コスプレなど) に親しみ、また、大学生が日本留学や奨学金に関する情報を得ることができました。



リノ・ウィチャクソノ氏(中央) とご家族

リノ・ウィチャクソノ氏は、長年にわたる日本・インドネシア間及び世界各国との青年交流の促進に寄与した実績が認められ、2000年にはSSEAYP国際賞 (SSEAYP International Award) を受賞されています。



AYVP
ASEAN Youth Volunteer Programme



University of the Philippines

ASEAN YOUTH VOLUNTEER PROGRAMME (e-AYVP) 2021

2021年8月30日(月)～9月17日(金)、「e-ASEANユース・ボランティア・プログラム2021」がオンラインで開催され、「ASEANにおける今後の教育システムの強化」をテーマに青年が地域社会とともにどのように役割を果たしていくべきか議論されました。

ASEAN事務局より日本代表者の推薦依頼があり、日本青年国際交流機構(IYEO)から1名が出席しました。以下に参加報告書の一部を掲載します。



長瀬智寛さん

「世界青年の船」事業(2017年)

未来のASEANは、若者と若者の対話によって創られる

本プログラムのオープニングセレモニーは、「未来のASEANは、エリートや政治家や外交官ではなく、人と人とのつながり、若者と若者の対話によって創られる」という参加者を鼓舞する言葉から始まった。ASEAN+3から集まった約300名の参加者が、これからのASEANを創る当事者であり主役であると改めて認識し、私もこのプログラムに臨んだ。

本プログラムは「ASEANにおける今後の教育システムの強化」をテーマに講演・ワークショップが実施され、各国のCOVID-19の感染状況や教育現場における感染症対策事例などが紹介された。現場にいる当事者のリアルな声が聞ける貴重な機会であり、プログラムを通じて新たに得られた気づきとして以下の2点がある。

1点目は、クライシス・コミュニケーションについてである。これらは、危機的状況に直面した場合に、その被害を最小限に抑えるために行うもので、情報開示を基本としたコミュニケーション活動を意味する。

講演では、COVID-19という不測の事態に対して、教育に関わる多種多様なステークホルダーへの迅速かつ適切なクライシス・コミュニケーションが求められているとされた。

2点目は、コロナ禍により、教育現場ではテクノロジーやICT機器の活用が促された結果、教育提供者の役割が変わってきているという意見が示されたことである。

今後、急速に変化と適応を繰り返していく社会において、教育提供者はその社会状況に合わせて自らの「役割」を変え、果たし続けていくしかない」と強調されていた。

地球市民として、よりよい暮らしを送り続けるためには

本プログラムを通じ、COVID-19がもたらした現在の世界が我々人類に与えているのは、単に目に見える健康被害だけでなく、教育、経済、福祉などの基盤となる人間の尊厳に気づききっかけであったと考えさせられた。参加者が一貫して問われていたのは、「どのように参加者が地球市民として、よりよい暮らしを送り続けることができるのか」ということであり、それを受けて私は、どの分野でも誰も取り残さず、よりよい暮らしを創っていくために、本プログラムで学んだスキルや考え方を環境に合わせて活用していきたいと思う。

また、直面している場面に合わせて技術や方法にアレンジを加えて、試行錯誤しながら活用するだけでなく、変わりゆく現状や政策に合わせ、我々のマインドセットも常にアップデートし続けることが教育現場に携わる我々のニューノーマルであると改めて実感した。

【IYEO会員グループの活動】 東日本大震災10年を振り返る

未曾有の災害と言われた東日本大震災の発生から10年が経過しました。震災は東北の沿岸部を中心に大きな被害をもたらしましたが、様々な支援を受けながら復興へ向けて歩みが進められています。IYEOも被災県を中心として、国内外のネットワークを活用しながら、復興支援活動に取り組んできました。発災後すぐの炊き出しや清掃活動等の直接的な支援から、現在は震災の経験をどのように地域防災につなげるかといった観点の講演活動を行うなど被災地に寄り添いながら、この10年間支援活動を続けています。今回は主に岩手県、宮城県、福島県の主な活動を振り返ります。




岩手県青年国際交流機構

2011年	<ul style="list-style-type: none"> 避難所での炊き出しや被災住居等の清掃活動等 株式会社商船三井主催の「ふじ丸」を利用して被災者に食事、入浴等のデユースサービスが無償提供するプログラムの現地サポートスタッフとして15名以上の会員が協力 山田町の水産加工場の清掃を実施 「IYEO縁側カフェ」(20回実施) 田野畑村応援バスツアーの企画運営 	
2012年	<ul style="list-style-type: none"> 「IYEO縁側カフェ」(7回実施) 復興祈願を目的とした地域のイベントや活動への協力(北山崎しゃくなげ祭等) チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を1か所実施) 第25回「世界青年の船」事業 大船渡市、陸前高田市での寄港地活動に協力 SIGA Japan SCAの受け入れによる被災地活動 	
2013年	<ul style="list-style-type: none"> 「IYEO縁側カフェ」(11回実施) チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を2か所実施) 「震災復興支援活動が繋げる雪国いわて西和賀と世界〜西和賀雪っ子プロジェクト」 	
2014年	<ul style="list-style-type: none"> 「IYEO縁側カフェ」(7回実施) チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を5か所実施) 「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY2014) 大船渡寄港地活動に協力 	
2015年	<ul style="list-style-type: none"> 「IYEO縁側カフェ」(10回実施、メディアにも取り上げられる) 新潟県IYEO×東北(福島・宮城・岩手) チューリップ花絵大作戦 チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を2か所実施) VISITとうほくの受け入れによる被災地活動 	
2016年	<ul style="list-style-type: none"> 新潟県IYEOとチューリップ花絵大作戦 「IYEO縁側カフェ」(3回実施) チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を1か所実施) 	
2017年	<ul style="list-style-type: none"> 新潟県IYEOとチューリップ花絵大作戦 詩人桑原滝弥、講談師・神田京子 夫婦幸福ライブ チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を3か所実施) 	
2018年	<ul style="list-style-type: none"> 「IYEO縁側カフェ」 チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会、中村雅人さん講演会を4か所実施) 	
2019年	<ul style="list-style-type: none"> チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会、中村雅人さん講演会を4か所実施) 	
2020年	<ul style="list-style-type: none"> チャリティー・トークイベント(坂本達さん講演会を1か所実施) 	

IYEO縁側カフェ

宮城青年国際交流機構

2011年	<ul style="list-style-type: none"> 塩竈市浦戸諸島桂島支援(物資支援、避難所でのイベント、地域の夏祭り等の支援) 女川町立女川第二小学校避難所支援(物資支援:長靴、Tシャツ等) 「石巻市立病院」医療従事者の継続的な生活支援・物資支援(日用品、食品、毛布、衣類等) リラックス&リフレッシュ1泊2日温泉ツアー(山形県IYEOと協働で企画、計3回実施)
-------	---

2012年	<ul style="list-style-type: none"> ・塩竈市浦戸諸島桂島支援（北海道・東北ブロック大会開催） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で開催） ・H22年度「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」ドイツ既参加青年の訪問受入れ ・「石巻市立病院」医療従事者への物資支援（PCを支援） 	
2013年	<ul style="list-style-type: none"> ・「東南アジア青年の船」事業地方プログラムへの協力（亘理町公共ゾーン仮設住宅でのASEAN交流） ・「グローバルリーダー育成」事業寄港地活動への協力（石巻での視察受入れ） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を5か所で開催） 	
2014年	<ul style="list-style-type: none"> ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を7か所で開催） 	
2015年	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟県IYEO×東北（福島・宮城・岩手）チューリップ花絵大作戦 ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で開催） 	<p>チャリティー・トークイベント （坂本達さん講演会）</p>
2016年	<ul style="list-style-type: none"> ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で開催） 	
2017年	<ul style="list-style-type: none"> ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で開催） 	
2018年	<ul style="list-style-type: none"> ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で開催） 	
2019年	<ul style="list-style-type: none"> ・石巻市立蛇田小学校 スクールミシン8台寄贈 	
2020年	<ul style="list-style-type: none"> ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で開催） 	

船と翼の会ふくしま

2011年	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人ザ・ピープル（いわき市）を通じた支援 ・あづま運動総合公園内避難所（福島市）での炊き出し ・学用品の提供 ・「復興の黄色いぞうきん」プロジェクト ・国際理解キャラバン隊（福島市立大森小学校、福島市立渡利小学校、福島大学にて実施） 	
2012年	<ul style="list-style-type: none"> ・復興支援雑巾プロジェクト ・国際教育キャラバン隊（小学生を対象に実施） ・ボランティア勉強会 ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で開催） 	
2013年	<ul style="list-style-type: none"> ・復興支援雑巾プロジェクト ・「原発事故直後の福島」を考えるワークショップの実践 ・北海道・東北ブロック大会の実施（福島市） ・「東南アジア青年の船」事業地方プログラムへの協力（日本・アセアン青年交流プログラム及びホームステイ） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で開催） 	<p>復興の黄色いぞうきんを縫う</p>
2014年	<ul style="list-style-type: none"> ・「福島の家族会議After 3.11」（震災をテーマにしたワークショップ）の開発と実践 ・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で開催） 	
2015年	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟×東北（福島・宮城・岩手）チューリップ花絵大作戦 	
2016年	<ul style="list-style-type: none"> ・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で開催） 	
2017年	<ul style="list-style-type: none"> ・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた 	
2018年	<ul style="list-style-type: none"> ・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた（開催に向けて準備していたものの、チューリップの開花が予定より大幅に早かったため、開催中止） 	
2020年	<ul style="list-style-type: none"> ・ブロックイベント「葛藤をこえた人のつながり～ローカルとグローバルの視点から多様な価値観を考える～」で、震災をテーマにしたワークショップと講演を開催 	

【IYEO会員グループの活動】 IYEO防災フォーラム開催報告

2011年に発生した東日本大震災から10年の節目に、2年がかりで進めてきた防災フォーラム。「被災地」東北三県は、震災直後から全国・世界のIYEO関係者の皆さまから多大なるご支援をいただき、活動を続けています。各県の強みを活かした復興支援活動を通し、今だからこそ伝えたいと、12月19日、岩手県・宮城県共催でオンラインと現地開催のハイブリッド形式にてIYEO防災フォーラムをようやく実現させました。



宮城IYEO

宮城IYEOは、東松島市出身で大学生の武山ひかるさんの講演会を行いました。武山さんとの出会いは、坂本達さんの講演を石巻市立桜坂高校で実施したことがきっかけです。震災当時、小学校4年生だった武山さんは、高校生語り部として当時の安倍総理にも自身の被災経験をお話したり、家族を亡くした友人の話を書き出して出版したりするなど積極的に被災経験を伝える活動を行っています。講演では、災害時の子供から見た大人の姿や、大人の子供への接し方など、子供の心の変化について実体験をお聞かせいただくとともに、「子供は大人をよく観ている、大切なのは子供にも役割を与えてほしいということ。」という思いを伝えていただきました。宮城IYEOとしても、被災当事者のお話を伺う機会を持てたことに加えて、IYEO防災フォーラムという場で、武山さんのような若い世代の活躍を伝えられたことが何より嬉しかったです。

岩手県IYEO

岩手県IYEOは、東日本大震災の発生以降、256日に及ぶ支援活動で1,922人がボランティアとして18,495人の被災者に関わることができました。直接的な支援活動からスタートしましたが、縁側カフェや岩手県の伝統芸能さんさ踊りなど、個々の会員の強みや思いが被災地支援活動に反映され継続的な活動の充実につながっています。そこに全国の会員も加わり、更に充実した活動となりました。IYEO会員は幅広い視野と各地の課題に対する共感力を持ち合わせています。そうした共感力をいかしながら、活動の受け皿としての役割を担うことで、活動促進につなげました。こうした想いのサイクルが生まれる場となったことは、関わった者として嬉しく感じています。

10年の活動の中で生まれたつながりを通じて、防災意識の醸成や支援活動のあり方など、少しでも皆さんにお返しすることができたのであれば幸いです。今後も被災地で活動を続けてきた団体としてメッセージを発信したいと思います。

IYEO防災フォーラム参加者の感想

- ・ 武山さんの言葉は胸に迫るものがあった。同世代で今度は実践していく立場にあり、前に進み続ける姿に勇気をいただいた。
- ・ 自分は教員であるが、熊本地震で避難所対応を経験し、「子供にも役割を与える」というお話に強く共感。未来を担う子供たちが置き去りにならないようにしていきたい。
- ・ 岩手の一人一人のスキルを活かす考え方が、会員の居場所や存在意義になっていた。
- ・ 混乱の中、3月19日には岩手県IYEOが支援に動き出し、日頃のネットワーク形成の重要性を感じた。「ボランティアとしての節度と礼儀」という「支援のあり方の指針」が共有されているからこそ、継続的な支援が可能。密にコミュニケーションを取りながら活動の核を作っていくことは都道府県の活動にも通じる。





PARA HEROes展の展示翻訳をサポートする

「IYEOパラスポーツ振興チーム」は、パラスポーツの支援を軸に活動するIYEOのワーキンググループです。アスリートの皆さんが夢を持って輝く一助になるよう、日々活動しています。2020年6月より、東京都に正式に「東京パラスポーツスタッフ」として認定されています。(https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/staff/detail/38)

ミッションと目的

パラスポーツの振興に向けて、IYEO会員の多様な人材の能力をいかして貢献することを目的とし、IYEOパラスポーツ振興チームは、国境／障害の有無による垣根なき大会の実現のため、次の三つの目的を軸に活動しています。

ミッション

Borderless Olympic & Paralympic

参加する全ての人々が、国籍、障害の有無によって分け隔てられることなく、互いの個性、実力を認め合うことのできる大会を実現すること

目的

1. 大会参加者がスポーツを通じて経験を共有し、国境の垣根を超えて関係を構築する。
2. パラスポーツの認知度/理解度を向上させる。
3. 訪日外国選手/観客の快適な日本滞在をサポートする。

IYEOとパラスポーツのつながり

IYEOとパラスポーツの関係は2021年に東京で開催された大会以前の2015年から続いています。大分県青年国際交流機構（大分県IYEO）の前会長である阿部友輝さんがPTTA（肢体不自由者卓球協会）の理事を務めていたことがきっかけで両団体の交流が始まり、これまでパラ卓球選手の国際大会の出場支援などの活動を行ってきました。

現在の活動

現在IYEOパラスポーツ振興チームでは以下の活動を行っています。

- ・パラ卓球国際大会の大会要項翻訳
- ・パラ卓球代表選手への英会話講義
- ・2019年パラ卓球日本オープンにおける通訳サポート
- ・PARA PINGPONG ART PROJECT「PARA HEROes展」展示翻訳サポート
- ・東京都認定パラスポーツスタッフ交流会への参加
- ・2021年、東京で開催された国際的な競技大会でのボランティア（有志メンバー、個人による応募）

ボランティアの所感

- ・ボランティア活動中にアスリートの試合前後の姿を見ることが、国籍・障害・性別や年齢等を越えて、自分自身を見つめ、時には周りの人と協力して、自分の強みを磨き上げていくことのすばらしさを改めて感じました。この流動的な時代だからこそその姿勢を大切にしていきたいです。（堺澤絢）
- ・大会中にたくさんの試合を間近で観戦し、これまでの価値観がガラリと変わり、とても良い経験をさせていただきました。また、ボランティア同士の絆も深まり、新たな出会いに心が踊りました。大会は終わりましたが、今回学んだことや感じたことは、今後も多くの人に伝えていきたいですし、ここでボランティアを終えることなく、パラスポーツボランティアなどを今後も行っていければと思います。（青木玲奈）



令和元年度 地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」イタリア派遣団

令和元年度の地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」で障害者分野の団員はイタリアに派遣されました。9泊10日のイタリア派遣では15か所の視察を行いました。小学校やローマ市庁、視覚障害研究所や社会的共同組合などを訪問し、イタリアの障害に対する様々な考えや仕組みを学びました。イタリアから帰国して数か月のうちに、社会は一変しました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、海外への渡航はおろか、日本国内の移動においても、厳しい制限が生まれました。

この社会の変化により、私たちが見て、聞いて、体験したことは、貴重な機会であったのだと、より一層感じました。そこで、私たちが学んできたものを共有することが、私たちがすべき第一歩なのではないかと感じました。

出版に向けて

私たちの学びを共有する術として、どんな方法があるかを話し合いました。出版に向け、みんなの気持ちが一一致したところで、次に「どこに焦点をあてて書くのか」、「だれを対象に書くのか」、「どうやって本を出すのか」など、話し合うべきことはたくさんありました。イタリアから帰国した後も、3週間に1回の頻度でオンライン会議を重ねました。

クラウドファンディング

出版に向け、各自が担当するテーマの執筆もおおよそ書きあがったころ、出版していただける出版社が決まりました。今回、私たちは共同出版という形での出版のため、費用が必要になり、クラウドファンディングで資金集めを実施することにしました。クラウドファンディングで資金集めをすることに決めた理由として、クラウドファンディングを通して、私たちの活動、本を知っていただけるのではないかと考えたからです。クラウドファンディングでは、多くの方々にご協力、ご支援いただき目標金額を達成、そしてたくさんのご縁ができました。



その後

クラウドファンディングやIYEO自主活動サポート助成金制度（チャレンジファンド）による支援を受け、無事に「イタリアで見つけた共生社会のヒントフル・インクルーシブ教育に基づく人々の暮らし」を出版できました。現在、クラウドファンディングのリターンとして、様々な形で報告会や講演をさせていただいております。徐々にではありますが、「輪が広がっている」「繋がっている」ことを実感できる日々です。

冒頭に書いたとおり、出版は私たちの事後活動の第一歩だと思っています。はじめは、イタリアでの学びを共有する目的で出版を考えました。しかし出版を通じ、目の不自由な方が、私たちの本を読むためにはどうすればいいのか？などより実践的な配慮について考えるきっかけにもなりました。イタリア派遣での学びを行動に移し、経験にすることができ、事後活動のすてきな第一歩になったと思っています。この経験を活かし、次の一歩を踏み出したいと考えています。



情熱をアクションに変えるための伴走支援

「社会を良い方向に変えたい」という情熱をもった青年が、その思いをアクションに変えられるように伴走支援をするのが、本プロジェクトの目的です。NPO代表、企業人、教師、大学生など様々な人たちが構成されたGLDPチームメンバーが、グローバルリーダー（GL）を選出したのち、約半年間、各人の専門分野をいかしながら、そのGLに必要と思われるワークショップ、ファンドレイズ、プロモーション等の支援をします。

GLはワークショップの中で、社会課

題に関わる当事者からヒアリングをし、自分自身の思いの原点を確認し、アクションプランを作成し、ビジョン、ミッション、バリューと詳細を何度も練り直したのち、約180か国以上から2000人の若者が集まる世界最大のユースサミットOne Young World(OYW)でプランを発表します。OYWで世界の社会起業家にアドバイスやアイデアをもらった後、アクションプランを再度練り直します。GLがアクションプランを実行し始めたら、GL創出プロジェクトは完了です。



プロジェクト立ち上げの理由

本プロジェクトを起こした理由は、三つあります。一つ目は「社会に貢献したい」と思っている青年に、その情熱を形にするための段階的かつ丁寧な支援をしたかったからです。二つ目は、IYEOメンバーには「誰かのやりたい」を応援する土壌も、各地域で築き上げたネットワークも、青年育成のために自分の持つ専門知識やスキルを無償提供するマインドも、それを通してメンバー自身も成長したいという意欲もあり、社会貢献したい青年を支援するのに最適な環境がすでに揃っていたからです。三つ目は、OYW日本委員とIYEOとの連携の話が入り、IYEOから青年をOYWに送ることが可能になったからです。OYWをGLDPのワークショップの一つと位置付けることで、GLは世界で活躍する社会起業家からアクションプランにアドバイスももらえるだけでなく、同世代で同じ志をもつ仲間を世界中に持つことができ、それがGLの情熱の炎を燃やし続けると確信したからです。

本年度GLに選出された矢島清香さんは、愛知県を拠点に、多様な文化背景を持つ子どもが活躍できる社会の実現に向けて「にほんご×こころプロジェクト」を始めました。矢島さんは自分自身で教育委員会にヒアリングをしたり、地域のNPO代表や日本YWCA (The Young Women's Christian Association of Japan) の職員の方にアクションプランを話したりしたこと



GLのアクションプラン、はじめの一步～絵本の読み聞かせ～

で、その人達が新たな人を紹介してくれたりアイデアや場所を提供してくれたりして、少しずつ前進しています。矢島さんは、「GLDPで学んだことはたくさんあるが、GLDPは自分の考えを安心して話せ、困ったらいつでも相談できる場所となった。今度は自分自身が次のGLをサポートしたい」とも語っています。

一人一人丁寧に伴走するため、私たちが創出できるグローバルリーダーは多くはありませんが、一人のグローバルリーダーが多くの人に良い影響を与えると私達は信じています。その影響がどんどん広がっていくように今後も尽力します。

共催：日本青年国際交流機構 / IYEO育成ファンド助成事業

IYEOスリランカ教育支援プロジェクト ～13年のキセキ キセキの出会い～繋がり～広がり～



プロジェクトの背景

スリランカには、家庭の経済的な問題等で学用品等を購入する十分な資金を得られない子どもたちが数多くおり、そのような子どもたちが継続して学校に通えるように支援することが必要とされています。「世界青年の船」事業の各国の事後活動組織の代表が集まる東京会議から派生し、日本青年国際交流機構 (IYEO) の会員によって構成されたプロジェクトチームは、社会貢献活動の一つとしてこのプロジェクトを2008年に開始しました。2008年～2009年は学用品の寄付のみで実施、2010年からは学用品の寄付に加えてフォスターペアレンツ (里親) プロジェクトを開始しました。また、折々にチャリティイベントを開催し、プロジェクトの状況をお話するとともに、物販などで得た収益を学校へ寄付しています。

コロナ禍で手探りの支援

2020年、スリランカで新型コロナウイルス感染症の影響が開始したのは日本よりも少し後でした。すぐにロックダウンで学校は休校になり、教育現場に大きな影響が出ました。ロックダウンの合間の学校が再開するタイ



新型コロナウイルス感染症のための特別支援の寄付を募り、マスク、消毒液、パンを寄付 (2021年4月)

ミングで、学校の必要物品を寄付し、児童の絵と手紙も集めることができ、例年に近い支援ができました。スタディツアーは実施できず、プレゼントを子どもたちへ手渡しすることはできませんでしたが、代わりにペアレンツからの手紙を現地に郵送しました。

2021年、感染拡大の影響で学校は再び長期休校となりました。再開しても、感染予防のため学校関係者以外は立ち入ることができず、学校との連絡手段は電話のみでした。4月に新型コロナウイルス感染症に対する特別支援として、マスクと消毒液、パンを寄付しました。特に、子供サイズの不織布マスクは喜ばれました。

長引くロックダウンで所得の低い家庭はさらに困窮し、日々の食事にも困る家庭が出てきました。そのような時、企業から寄付をいただき、9月に食料支援を行いました。配達時の写真は、どの児童もとても嬉しそうで、お米の袋を抱えた満面の笑みの児童もいました。配達後、保護者や児童からコーディネーターに何本も電話が入り、「本当に助かった。日本の皆さんに感謝を伝えてほしい。」との言葉も届きました。

いまだにスリランカの教育現場には制限があり、通常の支援に戻ることができず、ペアレンツの皆さんにはご心配をおかけしていますが、メールマガジンを通じて、現地の情報をお伝えしています。

コロナ禍での支援の広がり

これまでの13年間の活動を評価していただき、2021年12月に東京銀座ロータリークラブより支援金をいただきました。活動報告の場では、コロナ禍でも多くの方に活動を知っていただくことができ、新たな出会い、繋がりができました。

これからも継続して地道に活動を行ってまいりますので、引き続き、皆様方のご支援ならびにご協力をよろしくお願います。(問合せ先: onemorechild@gmail.com)



東京銀座ロータリークラブで活動報告に参加した「世界青年の船」事業関係者 (2021年12月)